
ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スメル5 『ピリジン』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール(M) 「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオフェアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

ノール 「いえいっ！」

エリカ 「今週は、なんででしょう？」

ノール 「今日は普通の制服。すなわち、セーラー服！」

エリカ 「ああ、例のセーラー服ですか」

ノール 「そう。『駄目な人には見えないセーラー服』」

エリカ 「意外と似合ってるんですけどねえ。駄目な人は、見えなくて残念ですね」

ノール 「今日はサービスで、腰のところで4回折ってミニスカ

状態」

エリカ 「折りすぎですよ！ 見えちゃいますよ？」

ノール 「大丈夫。ひところ話題になってた、安心の35センチ丈だから」

エリカ「ああ。どんな急な階段でも、見えそうで見えない

ギリギリの長さってヤツですね」

ノール「そう。駄目な人も見えないけど、普通の人も見えない」

エリカ「ていうか、座ったら見えますよね？ 電車とかで」

ノール「そこは、すかさずカバンで防御」

エリカ「そこまでするんだったら、3つ折りくらいにして

おきましょうよ」

ノール「ノール、足細いからなあ。足が太いと、すわっても

大丈夫なんだけどなあ〜……」

エリカ「……お姉様、なんでわたしの太ももを見てるんですか？」

ノール「こういうときは、良いなあ〜って」

エリカ「なんでですか!？ もう、細くて見えまくりですよ！

電車で座っていると、向かいの紳士が徐々にずり下がって

いきますよ!!」

ノール「へー、そーなんだー(棒)」

一拍の間

エリカ「今日は、何をするんですか？」

ノール「今日はのんびりと、消臭パトロールの予定」

エリカ「なるほど」

ノール「陽気も良いし、平和だし……」

SE…コンコン、とドアをノックする音（上の台詞にかぶせる感じで）

ノール「はい」

SE…ガチャ！とドアが開く音。

バスメル「おお！僕の姫君！」

ノール「わあ!？」

バスメル「まさか、会うことができるなんて……神様、ありがとう

う！」

一拍の間

ノール「押しかけて来たんだから、会えるに決まってるじゃん」
エリカ「お礼を言われても、神様だって困りますよね」

ノール(M)「そんなわけであ…(やる気なさそうに)」

ノール(M)「この、いつも通り、外見だけは二枚目の、キラキラお兄ちゃんは『バスメル王子』」

ノール(M)「いつも、ノールの苦手なクサイ台詞で告白してくるんだけど…：…そういうの、苦手なんだよね」

バスメル「恋愛を登山に例える人がいるけれど…：…キミに抱かれて眠るのならば、遭難するのも悪くない」

ノール「ジョージ・マロリーくらい、眠ってて欲しいな。

90年くらい」

エリカ「今なお、エベレストで眠っていますから。あやかって欲しいですね」

バスメル「ジョージ・マロリー……『何故、山に登るんだ？』という質問に『そこに山があるからだ』と返した、伝説の登山家だね？」

ノール「そうです（そっけなく）」

バスメル「もし僕が『何故、ノールちゃんが好きなんだ？』と

質問されたら『そこにノールちゃんがいるからだ』と

答えようと思うんだけど、どうかな？」

ノール「どうしよう……こんな時、どんなリアクションすれば

良いのか、素で分からないんだけど」

エリカ「笑えば良いんじゃないですかね？（なげやりに）」

SE…携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、ダウンゴ・ドット・JPでダウンロード販売している、ノールちゃんの着ボイスが」

エリカ「ステマですか？」

ノール「あきららかに隠れてないよ」

バスメル「すまない、行かなくてはいけなくなったよ」

ノール「そうですね、ではごきげんよう（棒読み）」

バスメル「では、またあおう！ 恋のクライマー!!」

SE…歩く音（F・O・）

ノール「今日は、アーリー・バスメル・タイムだったかあ〜……」

エリカ「なんですか、その用語は？」

ノール「最初の方に王子が来たのって、スメル2以来だから油断

してたよ……」

エリカ「何のことだか、わかりません（きっぱり） それで、

どうしますか？」

ノール「うーん……なんか、さわやかな空気を吸いたい気分」

エリカ「屋上とか、行きますか？」

ノール「うん、いいね。行こう！」

SE…ガチャ、とドアが開く音。

一拍の間

SE…歩く音 (F・O・)

ノール「とうちやくー」

エリカ「あー、ぽかぽかして気持ち良いですね」

ノール「景色も良いね。アイ・キャン・フライイツ！」

エリカ「飛ぶ前に、ちゃんと変身してくださいよ！」

ノール「こんな風が抜ける高いところで飛んだら、どこまでも

流されそうで、こわいよね？」

エリカ「いや、同意を求められても……飛べませんから」

ノール「そうなの？ でも、これだけ修行してるんだから飛べる

かもしれないよ。だから、試しにここから

『アイ・キャン・フライイツ！』って！」

エリカ「試しに飛んでみて、ダメだったら死んじゃいますよね!？」

一拍の間

ノール「……ん？」

エリカ「なんか……なんの臭いですかね、コレ？」

ノール「……ピリジン臭い」

エリカ「え？ いきなり結論ですか？」

ノール「『なにになにみたいなニオイ』って例えたいけど……」

うまく言えないんだよね、ピリジン臭いとか」

エリカ「まあ、確かに独特のニオイですが……そこをなんとか！

生放送をごらんの紳士・淑女の方々のために」

ノール「生放送って、なに？」

エリカ「気にしないで下さい。……甘いにおい、とは違います

よね。デオ・アリーナでは『灰皿』の臭いですけど」

ノール「うーん……『前の晩にニンニク料理食べたオジサンが、

朝イチにコーヒーを飲んで、タバコを吸った後の口臭』

みたいな感じ、かな……？」

エリカ「伝わりましたか、みなさん!? 勘弁して欲しいです！」

ノール「とにかく、そんな他に例えようのない独特の悪臭成分
——どこかに、ピリジンがあるはずだよ！」

一拍の間

ジン「ずいぶんなご紹介だな、デオフェアリー!!」

SE…それっぽい登場SE

ノール「だれ？」

エリカ「なんか、不機嫌そうにしていますよ」

ジン「俺は悪臭17人衆のひとり……『ピリジンのジン』だ！」

一拍の間

エリカ「ピリジン!? デオアリーナで置き場所が喫煙室一択だけに、あまり印象にも残らず場に出されてしまうという、あの!?!」

ノール「なんの話?」

エリカ「お姉さま、やっつけて下さい!」

ノール「話を流そうとした?」

一拍の間

ジン「『ミルクコーヒーを思わせるような、甘いローストの香りを伴う不快臭』と言うのが、俺の臭いを表現するときの例だというのに……あんまりだと思わないのか!」

エリカ「そんないい物じゃない気がしますけど」

ノール「どっちに転んでも悪臭なんだから、いいじゃん」

ジン「くそお……お前らはひどいやつらだ。よし、わかった！

これから学園内を俺の臭いで満たして、オッサンの口臭的な悪臭か、甘いローストの香りを連想する悪臭か、皆に判断して貰おうじゃないか！」

ノール「冗談じゃない！ そんなことさせないんだから！」

ノール「華麗に変身！ でおどあーっ!!」

SE…変身SE&BGM

ジン「おのれ、現れたな！」

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！デオフェアリー・

ノール！」

一拍の間

エリカ「みなさーん！ 変身したんですよー！」

ノール「みれば分かるじゃん！ なに、今日も駄目なひと

ばっかりなの？」

エリカ「いや、そんなことは無いと思いますが、念のため……つて、今日『も』って言うの、やめてください！」

ノール「そんなわけで、準備完了だよ！」

エリカ「改めて見ると、スカート短いですよね？」

ノール「これも、見えそうで見えない長さ。いわゆる、鉄壁スカート」

エリカ「見えないなら、いつそ下を脱いじやったらどうですか？」

ノール「どうですか、じゃないよ！ 風吹いたりして、単純にめくれたら大変じゃん」

エリカ「広告設定がR18ですから、めくれても大丈夫ですよ」

ノール「R18でも、その場合はダメじゃん！」

エリカ「そんなわけで！ 『見えそうで見えないお姉さま』のイラストを……」

ノール「募集しないよ、だから!!」

一拍の間

ジン「おのれ……ことごとく俺をないがしろにしやがって！」

ノール「なんか、ひがみつっぽいね？」

エリカ「お姉さまがぞんざいに扱うからですよ」

ジン「いくぞっ！……灰皿の臭いを、臭塗ッ!!」

SE…臭塗っぽいSE

エリカ「うわ！二日酔いの親父がタバコ吸った臭いっ！」

ノール「ピリジンくさいっ!!」

ジン「ふははは!!どうだ、『ミルクコーヒーを思わせるような、

甘いローストの香りを伴う不快臭』は!？」

ノール「かみじょーは、コーヒー飲んだこと無いんじゃないの!？」

(怒)

エリカ「いや、上城が考えた例えじゃなくて、集めた資料に書いてあったらしいですよ」

ノール「とにかく、エリカやつつけちゃえ!!」

エリカ「やっぱり、わたしなんですわね？」

ノール「そうだー！ マイクロゲルで綺麗サツパリ消臭してやれー！」

エリカ「よし、わかりました！」

エリカ「でよ・でよどやー!!」

SE…パワーゲイザーの炸裂音

ジン「ぐはあ!？」

エリカ「オツケー!! (餓狼伝説テリー風に)」

ノール「こらーっ!! スプレー缶握りしめて、パワーゲイザーで吹き飛ばすの 禁止っ!!」

エリカ「年間使用量6万トン達成の、マイクロゲルの威力は凄いですわね！」

ノール「だから！ スプレー使おうよ、たまには!!」

一拍の間

ジン「そんな、馬鹿な……」

ノール「馬鹿だって、エリカ。ねえ、バカだって！」
エリカ「わたしが馬鹿って意味じゃありません。

では、ここでビシっとお姉様がトドメを！」

ノール「よーし……いくぞー！」

一拍の間

ノール「デオ・デオドアーっ!!」

SE…デオ・デオドアーのSE

ジン「うわー、だめだー!! (棒読み)」

SE…悪臭退散のSE

ノール「おっけーっ!!」

エリカ「これで、さわやかな春の風を満喫できますね」

ノール「でも、ピリジンとアセトアルデヒド……硫化水素も

やっつけたよね？」

エリカ「そうですね」

ノール「灰皿の悪臭物質は、順調に消臭できてるね」

エリカ「なるほど、良い感じですね、お姉さま」

ノール「……でも、セーラー服着てるって言う学校で、灰皿の悪

臭がどんどん現れるのって、どうなんだろう？」

エリカ「あー……まあ、『学園』って言っても、お姉さまみたく

昭和の香りが漂ってる生徒もいますしねえ」

ノール「ノール昭和じゃないよ！ こんなにかわいいゆるふわ

妖精が、昭和なわけないじゃん！」

エリカ「まあ……平成も24年続いていますからねえ」

ノール「……らぶらぶ・ぼっぴんばんちっ!!」

SE…凶悪な打撃音

エリカ「わあ！ 壁がクレーターみたいに破壊されましたよ!?

あきらかに『らぶらぶ』って感じの打撃じゃないですよ

ね!?

ノール「うるさいっ！ 当たらないから、よけるなー！」

エリカ「当たりたくないから、逃げますー！」

SE..走る音

ノール「までーっ!!」

SE..走る音 (F.O.)

一拍の間

エリカ (N) 「こうして、ピリジンは消臭された」

エリカ (N) 「しかし、これで終わりではない」

エリカ (N) 「17人衆はまだまだ出てくるのか？ 次に出て

くるのは誰なのか？」

エリカ (N) 「エリカの技はどこまでいくのか？」

ノールは結局、昭和でファイナルアンサーなのか？」

エリカ (N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は終わらない…

…」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」

エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」

エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」

エリカ (N) 「マイクログルで、消臭する」

エリカ (N) 「また、来週も……」

ノール (N) 「『デオ・デオドアー！』」

おわり。